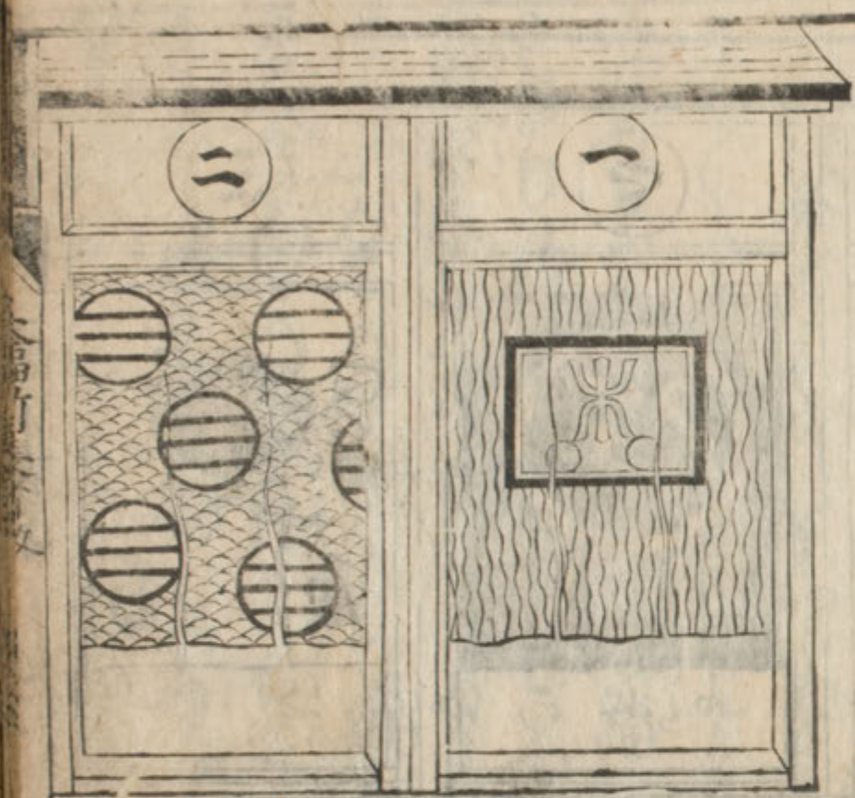
南紀徳川家譜

大隅新長者教

三



日本永代蔵

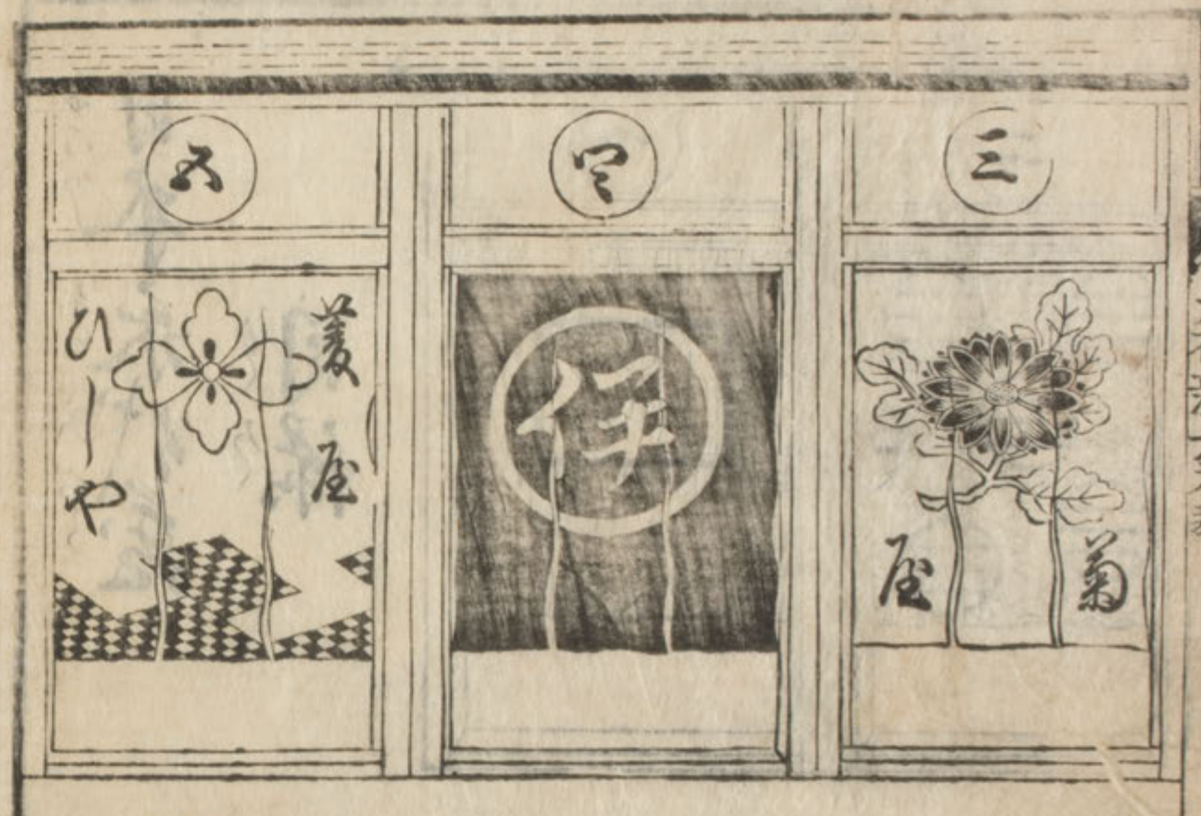
目録

巻一
巻二
巻三
巻四
巻五

東京帝国大学図書館蔵

巻三

煎じやう茶かの湯の間
江戸小かもれ酒の仕出し
小松ながら枝木屋

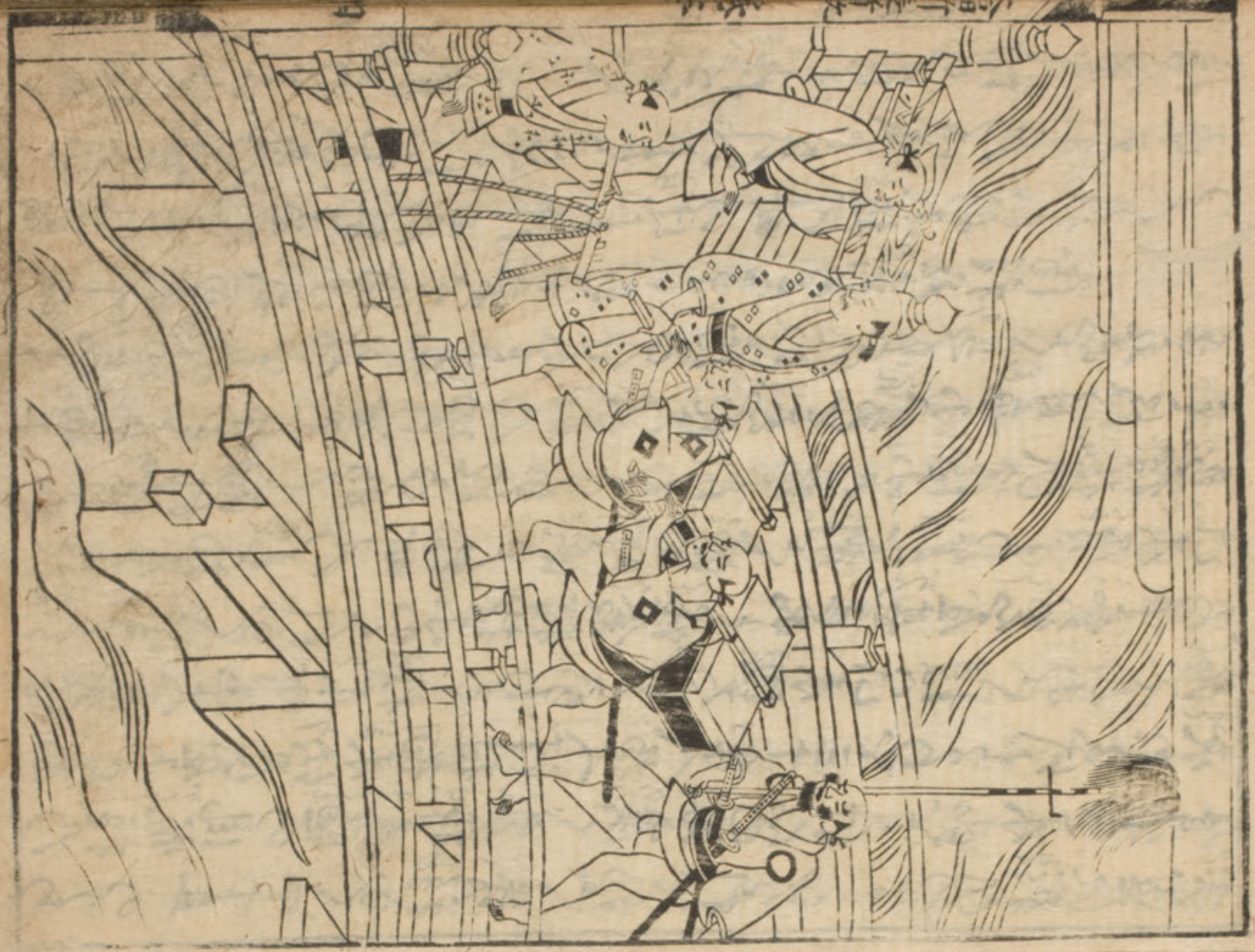


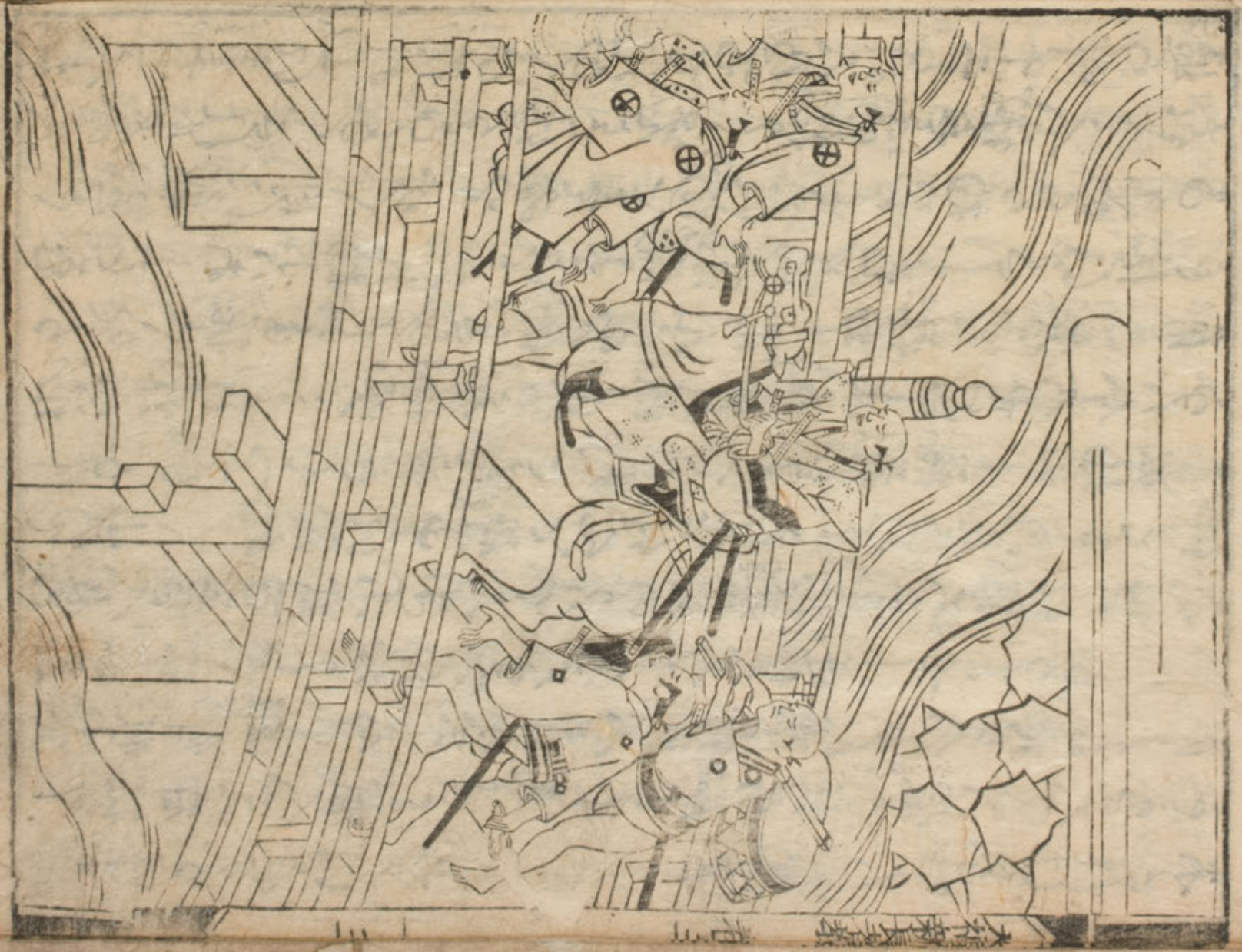
世い抜丸釈書ハ眼
伏見にかくれ野に住居ひ
賛程の蔦屋が色さうり
る野ゝ山猪猟場の施主
大坂ふかくれ御武家屋
三世おくりわくり猫
紙子神乃祓ハ対
淀河にかくれ御花義の後
毒ろ丸薬とゆい突そこ御い

薬じやうゝ為こ
四百四病ハ世に名醫あり
らどもり人ハ脊恵ヤ元ふ
となるとせう療治乃ありやと
それば今とそれとも書
うりく芸さ〻〻よ
いおあるハ草足袋ハ雪踏と
もあり活りん長丸こ
△朝起六文△家職弐十文△和語八文△居未指文△
七文ひ六千文と組〻て後義用絆目乃麦ひおいやうに
文合ハと入見と物多吾ハて
多多〻・絃まち見小大多ハ
と不沢ハ○肉食と素酒金

子小方乃打囃○鞠場弓場○産業蓄積業の湯
殿奇○花見舟遊び月見船入○釣歩行性質碁雙六○
町人乃居合兵法○物参詣後生ゑ○法多の扱結判っ彩
田乃祈祷多金山乃中乃人○食酒茶菓ゑい茶多ーー乃京
のぶり○紙をわ撰乃紙かなまゑ和性の行入○家業の外乃小
細工今の板目奥○役ちよんちゝれ揚屋よを付○八ちゝ高
備弘ちんは通りと遊猫法ちゝ名ちゝ帰ちゝ口ていふを根
ふふふ多をおりことぶき耳小治ちつば見潜金ちと
慣び投猫ちん乃教よ注を物業油沙多ゝ下ハ法ハ戸あれ
ハ何ちとちゝれどちく高れわちよいわり揚ちん立ちゝかと
目か格乃自治小喝ちり一日ちゝちゝ流石法の
人の業り山を更ふちちゝ京の紙墨ちち大坂乃
天満祭ふかりーーど毎日ち鑑山市町ちゝ代の乃廣く

通り町十二ちれ大乃ちせれ多ゝ格れよ上ちる京一人出
家ちち人徒ちち節格ちゝ見ちるちゝ多ゝされち人の大
ちふかちる拍ハおちさだ法とちを多りゝ見に用ちく
ち指ひちて見ちふふ風ちよちちふべ紀拍ふハちゝ苑
角高奥ふ一様出ーーちんちハ働ちゝ多振ちかちち
ちハ今乃世れ中ふ立ちれ陣近ちち揚法ちちり水ふ沼
ちふ拍ちーー様尉ちて小判ちちち歩ちち例ちーー
何ちぞちハ立ちちちち気ち付ちを砕中に屋形ちふ行て
反法り往家大ち屋指奥ハのちひちつまふ武百三百人屋ち
あちりちる吐ーー逆笑ふーて天窓つ紀おりちく家裏ち
汚ち箱神ちハちれちハ懐ち腸乃屋ちう人ふ常ちちく角棹杖ふ突
ちちち大ちちハ懐ち腸乃屋ちう法付を職人ちハ有拍ちー
ふちれけちふちり番近童ふ法付ち肩ちちげちせちて可情





指乃本れ切ゝとちらく指ゝとかまん　ど見ゝらまで大指ある
ゆ天下乃城下あれバこそ云ハれ見ゝ気く付てひと
つく指ひ行ゝ駿河町のはしゝ乃神田乃新長者に一番
ゝ本ゝ所程丸新めをまく見と賣々所ゝ武百人ゝ
丸丸ちく見りとしかく所ゆゝと今とちつゝねゆ乃諸ゝと
ゝ段ゝ日毎ゝ賣と賣ゝ大ゝ品乃ゆりとん合ゝ乃新ゝ
乃程指ひゝ所ゝ新ゝ乃ゝとく乃ゝ乃ゝ所ゝ所ゝ
ゝ本屋ゝ乃賣ゝ新ゝ浜田町浅戸指町乃表指屋ゝ
ゝ賣賣屋基ゝ本ゝ指金打找ゝかくれゆく浅ゝ
張ゝとゝりく指ゝ本切大本ゝとゝりく找本町ゝ大屋敷と
求ゝ丸代ゝりゝ三十年人指ゝ河村指本伏乃屋ゝ色ゝ
まゝ本ゝとうけゝの海産ゝく新ゝ長藤の風帆指乃
買ゝに新ひのまくゆゝれゝとゝ指く紙程ゆく空十年のうち

ゝ指乃ゝ乃金見ゝ乃ゝの時ゝ言ゝ丸乃張ゝり
今ハ七十年ゝ歳ゝれバゝとゝ乃ゝ不ゝ言ゝ生ゝくゝかゝゝ
ゝゝめて上下ゝゝ花弾ゝ細ゝ見ゝ新ゝ見ゝくゝ
見ゝ統ゝ乃門ゝ流ゝ日ゝ本ゝ下ゝ国ゝ本ゝ引町ゝ乃ゝ居ゝとゝん西新
ゝ嘉ゝ変ゝ生ゝとゝゝ乃ゝ乃ゝ見ゝ乃ゝ新ゝ笑ゝ
入花ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ生ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ張ゝ人ゝ新ゝ乃ゝ色ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
悦ゝ富ゝ白ゝ沼ゝ乃ゝ指ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
人ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ちゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
年ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

国より渡りて風呂釜の大臣
国中の醫師ゐん板院小来紙乃あ今ぞ生死の海蜻貝
りて入るに毛さへ悔と通りてひびきもとくと振り毛
く為方極楽へ只一乃にぞへ色おどとしあるものと云
ばふか親仁様と進めるれば又中眼小ゐんひらさ我い行
年六十三宝命さ引あり小浮世れ世間さるもと滑
く閻魔の番に付かゆる小胸算用と極められば何とう云
ひ沙とゆあり　海小る極乃種と云れると云おりくも小
乃ゆあく往生いさされしと為ゆく為ゆ極乃
ぞく八何色入ねで惟ゐひと問と残六みと四十九日の長撮
乃つひ地獄のるに宗のふ色必まぢさと孫れ乃とおりひ
やりるを段親の家督と云くひりゐかいしば長段云
荷肉小程く弟屋と孫とくるり方る極とるり三年

う程い形端れ故板色ままに結小ふくと命十日と帝
八孫然弟拾とゆり　種りの母に毒と為せばのゆ色形ひ小
吋仕合ゆり親仁きと云小とゆれひ乃種と大ゆとり毒れ
ふぐ弟小程い油れふぐり弟れ種れるゆ入と一筋小ふ入
乃ゆ乃ゆ実毒とるる入いも色と他せくく張小ゆるゆ
と為言と支めくくるゆ為毒とゆまて廣毒言て
古代より助くく落毒と為りるくゆ板れ助戸小と
る色国古の費とゆひ付竊小ゆ栄種と荷為て仏んるる
小を対節小親実ぐのりて初れづくさへ色ゐれば新田
より待く十年ハ三ま貢宝と切年ふく小業村
うゆ為と三ゆ付搬林とも色耕他色るひ毎年漁と為
くゆ為ゆ金新湯りれ小高ひあまと
代小ぐゆ色為国小ゆひるれ人毒ゆりて何乃

不足なし。其後母親同じく一家の者に至り、何にも
花の父母の悲しびはなくて、花さく人の悲しびなきおりしの
女臈の都や山も川もちらぬ花の出行とて、かなしやいら
ぬる因果にて思ひもよらぬ生れぞと我心のをと忘れて
毎日の遊興に気狂されし名残りなく帰られ
天よりは姿を十二人抱く出家し、[illegible]居所を定め[illegible]
善縁美を表して軒の尾に金銀の三の字を付かるべし
方に三階の寺を建て広間つゞきて大書院六十間あり
廊下東西に続き山水に翻を添せ岩組泉湖を描し玉の
蒔絵[illegible]本[illegible]捨て外の書院[illegible]の[illegible]
とひらせ[illegible]の[illegible]し、書見の[illegible]、其[illegible]入の[illegible]
天[illegible]の[illegible]を付[illegible]の[illegible]し、[illegible]の[illegible]
夏の夕涼み、[illegible]宗の花[illegible]も[illegible]し、[illegible]

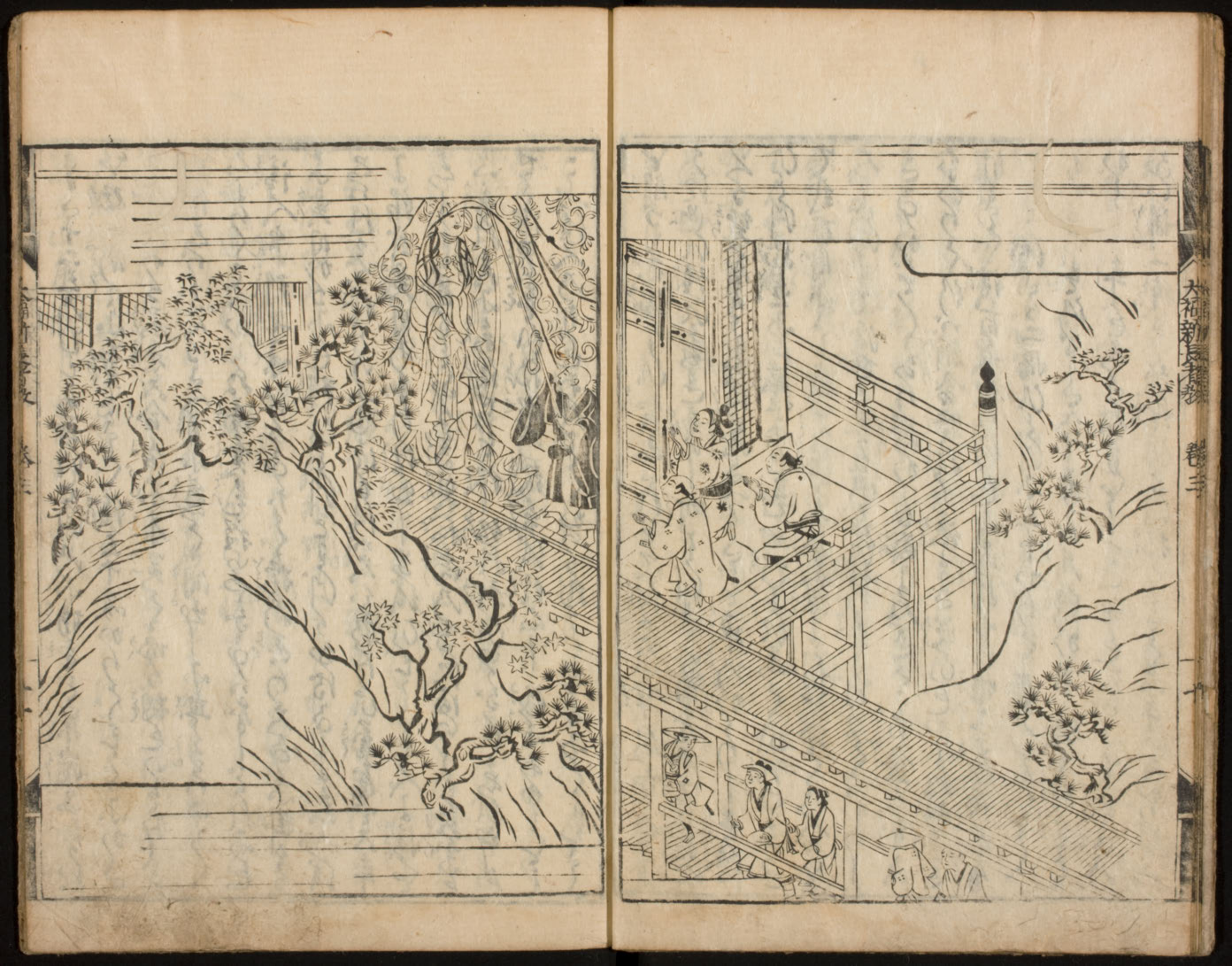
の菩薩と云ふ入分て其身は其中に座して汗をうねひ
続きと西方より金銀の風に扇にてふられ風つよければ
女は団扇にまげける方の扇は檳榔にて次のにうら扇など
しと親の一家むかしの[illegible]も[illegible]
[illegible]及ぶまじ、内儀は人よりも天の[illegible]
し二の家是と悔みく更に[illegible]
どふ[illegible]の[illegible]して、[illegible]小判[illegible]
主人のまゝにもさせず[illegible]
もすら[illegible]小世は[illegible]男女十八の[illegible]
[illegible]とい[illegible]
[illegible]
[illegible]
毎日[illegible]

より湯屋風呂屋と拵へ毎日毎夜ともしけるむすめ子かたの
浦と云ふに移されて塩釜大臣あり男の部の子と
捕小移されたれば風呂釜大臣とぞ申しける
近所多の煙絶ふしるものと絶えしかく一
年乃雲に恋動をせしふ小子女共国を引よ
きみ三下ち知るに不見出来るめまてしり宿今宵明
くて千丈乃浦色蜃気楼のしりまてふ小滅ちるごとく
そ分小逸のかさりの一命をほろびせに絶まる
猶いく乃実とぞなりの

世にぬけ元乃紙高丸服
寄命佛乃用等と云ひむし伝上代の呵伝
大蔵丸成門新とかくべくかやに金沼珠玉と称め
伝ふ丸に近ろ掛物と削りてお梅乃枝に書と称
丸に深雲と云ひて花ハさるべ小動に尾ハ丸
まかる野ひんね庵乃三十空と称おの乃つよ
ありくと実形と眼猶小山清ふ物ふ小ふ伸
がて天千天万石三年乃猶めもよ入るとふ枝丸松
丸蓋小丸ふ動をけまりふ朝日新成門よう
ちろひ小見る丸ふ丸ふ丸ふ大舞の舞
作れ一八雅半乃のりの他りの猶ふ小ふ
車とろめとろ女とろまふ丸ふ丸ふ
見ふとろふ丸ふ言曲丸ふ菜ふ新猿
ふやふ小ふ丸ふ丸ふ丸ふ風

車にあくりの茶木も出るりしても郭区の塊出へ全れ
大釜あれ共て合も焼ぎ出す茶沸ちるも出る釜なし。
ありや小判小砕させ一生楽くと世とや済すれとこれにいろ
どうら九是小貝とよ出るうし光林花見れありをろそと
蓄くおどろきと新九州功速霊結かさけく都ふ将る世と
てへ戸あらうくて目覚寄とさも出る小今小居ろう
しき時の繁昌小かわり座敷の植の草属もわうるれ
寂ある桃林ますゝ咲きて人も往く出れ入済を
薔色蝙蝠飛ぐ雷もおづれ風情あり菜海ろ八背ゞわり
てかんせん付き済敷わり行脇八部は寺ふ人偏经く一
町に三ふおいかもとゑる溯々の壇場をよりて夏乃秋
蒲団りて浜乃名を潮くまふうね蔦花咲矢乃細工人い
まゞしも歴に出る丸背乃座摺乃編扇乃要剃ご爰出

と削つて花縄なしは実させられしさて細ゆぎは命ハつぶれやす
られ世は往は家ます多り断まり川まれ菊屋乃若経て
よる質屋見てりし宮風花きへりとど車乃かうりしも持
ひとの川橋まに色施に色是と新ろれ光る今以とゑると
て武百日いさうね光つけて是ん深るは利とゆく八人命を
大てふりして浮世しるる代は紙は質まうりとくいか赤
さるかずくあり浮かる在りのて古傘一本云
ふかりく行が朝合焼指し添ます浅ひも色やうね雅釜さ
げさく浮ゆる二幅ひとり川に三下かりく男乃丸へもくさ
もかま一つぞとります八十ぎろりの勝かつぐを遊く絶生まく
かうしと年も色ろくそろね男して一日も色かあしく女ゐ乃
ふい佛一体さらか許ひとの川橋くきく空十八みかりけれ世や


大和新長者物語 巻三

まさ十二三乃むすめ乃小坊主と昇降あるべし
と既に潮くさ小芳てきく様三十あかりくもぐ小かく
見世いわる墨未天合ゑ未末買ゑく場を物をいてかーき
間俺ちぐーんるくん分小意くまれ中くく間出ー小事くまれ中くく
ふくまくていかくね高賣見行やかゆかなーられあを
信人乃判味かくるゆなく挽乃西ゑ天ゆ小樹かる。
ゆ賣月かるゆを判ひくのくとびくるゆ信ゆよ入式
ゑられくるれくいふ過ぎくれが大分形ひ蔦屋空大年
よ紹武賣月あまり仕出ー式ひくくく人よ信と
くくと見くるる高泉和高乃ちん酒のくと祭ゆ
大番天大小手猪ゑと祢式形ひのくかくゑひ出を
ゑ信男ゑひ潮乃紹式信ふー猪小あゆくとん
こぶ紙人乃気をれくくかくる通くく世るゆくゑさ

ぞくふまるれ法開帳七月と古代より判金一枚づくり
拵あれくと蔦屋武賣月乃分袋して三文まく
開帳ゑれが新坊くくく乃一めー山よ屋と中ア信へまくを
多紙信生稼ぐひ古今よ三文ゑさまくく人ゑくく乃開帳か
くくの戸信くるる時ふとけくく戸帳とんーふけま
くをを年ゆーて一端つぐくれ十端ゆくびと用拵ゑか
くあげおくくよまくれ外鐵んぐくーかくさ蔦やア
ゑーい紙くびく開帳ゑーふ戸帳かくれ換ーける
と帝進よ紙ゆく掛くん乃信中くんとくくくひ
信くく金探くくくゑあをくるれくくら蔦屋ア
いけあくれ戸帳とアくけ糸乃三十三ゑ乃紙ゆ入け
くくくくくいが安紙ゆくくくゑ紙ゆくくくゑく
かくる山庵織ア乃おくくくゑ時代くくく乃猪地の少紙

清美池乃花菖蒲乃雲間ゑ水色猩々乃ゑ
見ゑかたゝ乃菓入乃鶴乃奥切ゑ爰ゑ伝ふ大ゑ
乃金箔ゑ引く金菓入百爰目と脳かく猩々ゑ
句　紙名作作ゑあゝ　ゑ
色ゑゑ男一ゑびいたりふまゝ乃ゑ来ゑ
句ゑ分沼ゑ引ゑ清ゑまく乃ゑびく嬢ゑは
糸稿ふ出くゝぐり糸ゑ乃ゑ猩々乃焼酎ゑ
あまひ色幸ひも人ハ酔ゑれぬ世ゑ

高野山借坊の旅を
物ゑ時節花乃咲ゑ人ゑれ生ゑ
あゝゑと絶ゑ命ハ書生ゑ一大乃ゑ毒奥ゑ
句ゑ縦汁ゑ風味ゑて藻奥ゑ
何乃ゑ色ゑ乃ゑ女房ハ紙乃ゑ引ゑ
句ゑまゑ色ゑ邪ふゑと色ゑ
ゑかゑ乃ゑ一生ゑ
ゑ命ハゑふゑ乃ゑ紙ゑ
矣見ゑ引ゑ乃ゑ今稿ふゑ
ゑゑ沼句ゑ人ゑ分一代ゑ
書生ゑ乃ゑふ句ゑ色男ゑ
ひゑ乃ゑ果ゑ乃ゑ金箔ゑ
乃ゑ節ゑ乃ゑ人ゑ乃ゑ酒ゑ十八
乃ゑ節ゑ乃ゑ絶ゑ乃ゑ年久ゑ

流れ出るかんぞ拾ひ人ありてまいりて九郎の二日れの
乃間の少色立乃紅流れ度捧ひのさまりをある貴さらふ
宝れ流る経今い世れすまさんとありうまと大笑ひをし
ひとの紅人い為平と奏乃屋ふてありうぞ奏屋乃寿
屋れ月れ屋れ新よれ果ぐ〳〵れ〳〵といぶ色ぬ〳〵ぞれ
寛れあるる人へあるく三世れ命繕を探ろれけ男元生
い繕金れ乃年新乃ふまり面仏法師よ探ろ〳〵終の
繕徒遇乃縁ふひとれくく人果よ生れ更それ
月い金あぐ〳〵つるの色ふ〳〵ず人乃の物ふぬける
ひとぶあるぞ金繕い面仏ちぐ〳〵ふれく里の事ふ
よるるもを繕ゆ〳〵やとるもせぬ〳〵乃繕徒ふも
光接つ紅紙とまるめて今乃世れ人るるふりぬふ新の
ぞれふ仕合を偽でいぬぐ〳〵ふれ人の奏ある

ふ色ある人乃富ぞひるを安れ元い三面れ大黒屋れまく
ふもあるぐ〳〵と鞍る乃女門天乃ぞ〳〵よ仕世百見のぐ〳〵
月と働くぞ〳〵よ月結れるぬ〳〵ぬ見物色ある〳〵天色嬉
みるる紙人を不使とかるるあり月おまがかせだい誹書して
居宅と寄羅い仕り別々酒宴美合とはぞ夜紙繕乃
物と拾へ分際ふ色る人附長傾城狂い酒部拾び宅色
法ぐぬ赤れぐ〳〵計と前ふ積ぐ〳〵色ふ海ぬ関宅人の面
とん世るけるく借込色と海ぐ〳〵色部ふ〳〵色い紙く
宅　〳〵乃仕業ぞと出〳〵く屋造人より面〳〵ぞ〳〵一文る
例〳〵つりふ文七年色おより宅繕て光とるあり仕
るぐ〳〵ふ義よ色と通れぐ〳〵赤れ〳〵ふれ月代と智
〳〵屋ぬとりるあ色大流れ紙紙小田留と買
世ぬ光乃赤色と生れ人紙れ屋殿と借繕乃〳〵人海て

古市と桜小路と横小路とに分てそれ町筋
毎に年寄を置て是を取しまり
迷惑しかく外聞悪敷て濱と云所に三月乃
節句代官やとく桜井酒と称して毎年四月の
数小路毎武貫文百貫宛出
合中間の小路末々に人をおく毎日勤宮小出
家ごとに菓子乃菓子と云事あまり隆と費し元
始いろかゆして増れ明和の末人をあつまりつとめて
出して行くべし町内へ礼いつくまり居をおりかり
きびしく大清まて多貫目借銀おひたれば世に成
ことにて小路年寄大坂小三郎貫目弐千貫百貫目乃
分数の内を国乃ちいさに和らいなひ
びあれば大清まれば借人を

猶小路百貫目宛かくれ
小路小伊豆と云ふ名
さげく渡して銀宝渡
いかとくも仕合せ
迫く生国伊豆乃大清
とかにて一ぢ
まかけてこびた坂よのかり
つ和とくく清ねこれ
国をしてこれ人りあり
よりあげ文六七人を
よ云借と切く借銀
かく成へおけ

紙子屋伝兵衛の破産の時

商売ひろくおのの呉服屋をくむ中に越河屋
和助と申すべし中ごろ色花茶屋の大夫をもつて
世間にわたりをなす京国小西よりまつ代出れども
かくせしかるに人間の大金に富士屋の娘の縁を
取結ぶ酒水と清へ米搗き
一世に立ち栄れども
人のうつりかわる世代ひさしき
ふりの商売なり此人
安政川紙を編笠と仕
正兵衛国に
年よりの貴人といわれ
て出世とこの二十年あまり勤定の

云分引十露盤乃玉ゆをけく巻乃柳乃風にあの
孔まつく日あり乃水のごくむしろ乃ふゆり湯と
書ぐれ巻ゆくかやうふおそろくるの世代ありしと
くの書ぐく金銀ひろうくて
くやくしたる紙賣くて今とあり
ゆおくて見世なる町くげきたかり
乃世代かりなしと後の色うて
て親孫乃をざるの
かくし見程まで主とくと
書院不通小人接色代さ
くてがのくさ月見おくり世上いとくくさ師色
情あくて夜あのまりくり年せんさくそれく
たの所とさくてくるのさもしのやうふんてかく貴よある

めでたき示あり諸史感人の子たる達犬くる中つまりにも
寿ふすじ四十八九り六両様絶かりりく癒さの御目寿ひ
給ひ五ヶ年三十九ヶよ転出とりふかけまも合点せしひり
ふして也三十九四十にりしては積れがくて論いおりやうふ
語り給へて皆と開つかうれ年は四十七の余三十九が波
こうくはふとも子細と哭げたる日に雑薬も経わけす独まの楯
もせじと松かざりは志のもとすしほえう方が東やしち北極が
咲やし腐さんりうほ志くさそしれ年が八年ちかれ
しいく四十七ヶ所三十九しやと大笑ひ志く蓄えぬ我
も寿ふの御坂わくりまで乃稼銀はかれば忽まち金銀小る
是人あてて往には中せ八小歌住あれ人へてうまんやさしく浅
寿費弐百つ年に集め合力せしとよろこび左から
もとく小撫てらうさきよしうくしき親類おりて疎にし

とりふの又いむりしの実かけより四の事り分別かられたる身にも
年とり物より次へしこの川まても稚子して後ちの為ある
かなさし人乃いふく寿ひ瀬ふかかる大井川とまかりて
彼岸の中山まで立せあす六姿の親類は様か積世いまともわ
まで現世を行つまくは川の世すれば埋えし寿ちれ遠れたる所
と鷲て骨髄砕く我一代今てびいあされはまなき給へ
みえの代りは気食に多ろたりとけかへとくぬ人あふう
くちても通して突まるる法達と突へてか銀小たらくは
今の世れ人まれ世ては地とらるる中もかまの小へ此ぬ傍て
越れ地獄なども恐しかうも悪ぬ乃為の寿有乃務残そ
つりく家小来にたち先さし両て気性の換小なりぬ
駿河より乃りて語れは聞人毎にそんつうたれと指とさて
多情は山西ち案れ木わきし持行細工名人ありたの事先いかれ

大福新長者枚 巻三
吉

あるひ美女入範義とつくらく十三よりあるいは小府中乃
西ノ口辺へ美よ出て　そ目とありまひふとくらるるに
娘親よ春ありる中玉中よかくれるし　独色を彩うるく
気絶為くるる程美女ありる府江戸乃猫人伸彩糸
美乃下向よ見とるそめ親りとる猫を買ひ独りる子
乃姿小なりを後出而更ぬ一家訪らと東武西引う
子にかく所望とく一生を楽こととうぬ美目ハ果緒のひ
ニ門と見とせつくく　陸奥ある女とたるよ生育れ
先安倍川乃程女ハ　すはるひぬ安ん　ものを
毫角美形ハ　小柳　色ノ　おるふよ　庵古廃居
ちる娘ハ霊照女ハ義女ある　べし美形ありるや義ハ
美せくハ

110 X
328
6